

小田原市民と共に創り共に育む未来へつながる医療拠点



小田原市立病院
Odawara Municipal Hospital

北東側より正面入口を望む

今回提案

単純形状
Compact
空地

1フロア3看護のアップライトピアノ型

堂塔基壇型

1フロア2看護のグランドピアノ型

3看護アップライト型構成の提案

「既存病院を運営しながらの建替え」
「十分な工事エリアの確保が困難」など、
本建設地での厳しい建築条件をクリアし、
市立病院に求められる高度医療を実現するため、
水平移動距離を短縮し、上下移動の連携を重視した
「1フロア3看護のアップライト型構成」を提案します。

コンパクト化した「アップライト型構成」のメリット

診療動線の短縮・連携強化

- 診療部はコンパクトな平面形状として水平移動距離を短縮するとともに、縦動線での部門間の連携を強化。

1フロア3看護単位病棟

- 病棟間を連続させた1フロアを3看護単位とすることにより、病棟運営のフレキシビリティ確保と、スタッフエリアの共有化など効率化を向上。

拡張スペースの確保

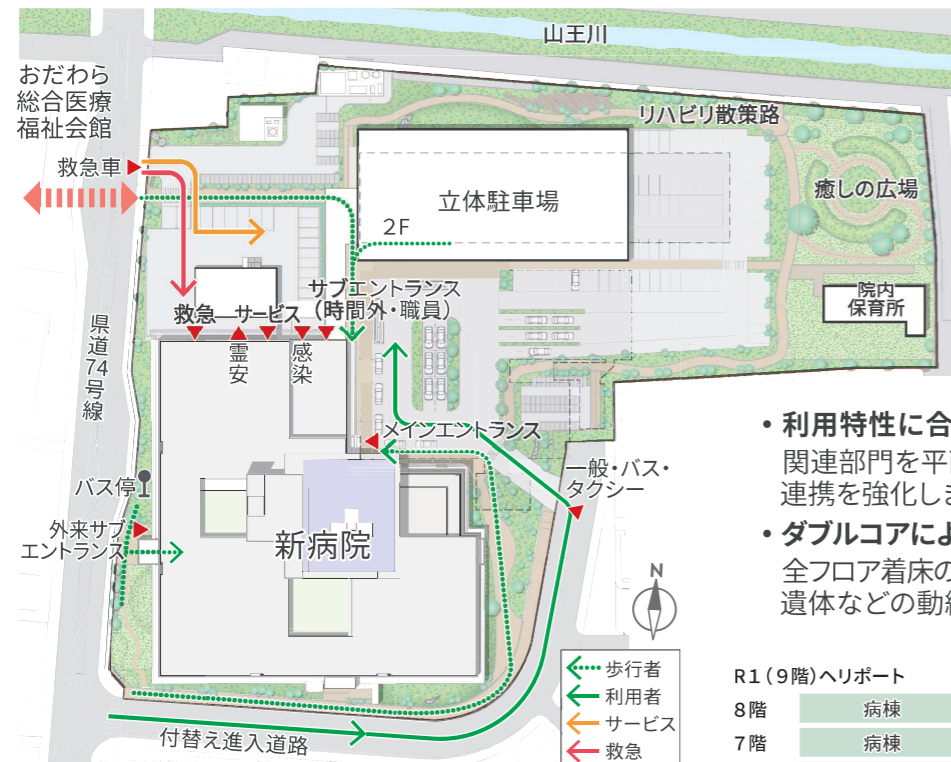
- コンパクト化により生み出される北側のスペースは、診療部など将来の増築スペースとして有効に活用可能。

工事期間中も既存出入口を維持

- 工事期間中に既存の救急入口、外來入口をそのまま利用可能で、仮設運用の必要のないスムーズな建替。

基本計画図 今回提案

景観・近隣への配慮



- 低層化により景観への影響を低減：
基本計画より高さを抑え、小田原城への景観・周辺環境への住環境を守ります。
- 新しい医療のランドマーク：
小田原城、県道等からの見え方を検証し、調和しながら存在をアピールするデザインとします。

標高68.3m

▽50.1m

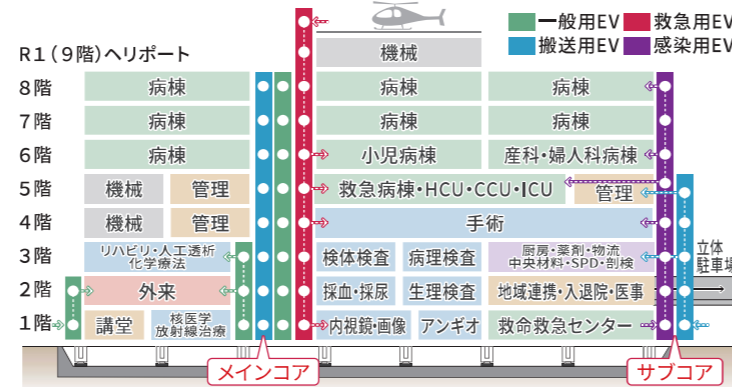
▽44.35m

○景観に配慮

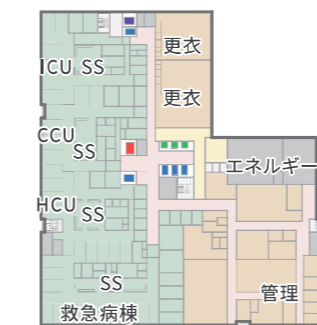
○近隣への配慮

基本計画図 今回提案

- 利用特性に合わせたフロア構成：**
関連部門を平面・上下に集約し、運用の効率化や部門連携を強化します。
- ダブルコアによる完全な動線分離：**
全フロア着床のサブコアにより、出勤・サービス・感染・ご遺体などの動線分離を徹底します。



- 車両動線の分離：**
県道の渋滞を回避するため、進入道路は一般利用車専用とし、救急、サービスの動線とは完全に分離。
- 多方面からの歩行者用アプローチの設置：**
足柄駅、井細田駅からのアプローチに配慮し、北側にサブエントランスを設置。さらに県道バス停から直接入ることのできる外來サブエントランス入口も確保。



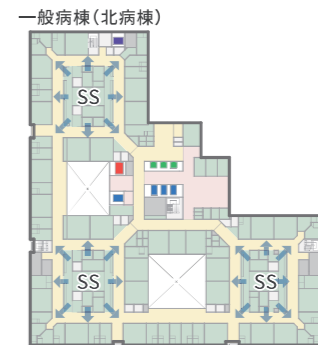
5F 集中治療+管理フロア

- 集中治療室をシームレスに集約配置
- 管理部を隣接させ将来診療部に転用可能



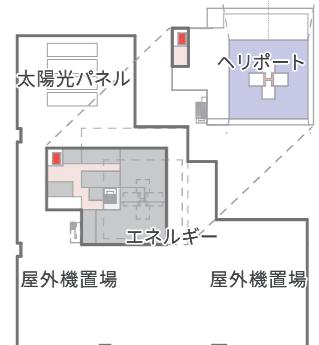
6F 周産期フロア

- 分娩-NICUを直結させ緊急時に迅速な対応が可能
- 産科・小児科との連携も重視



7・8F 病棟フロア

- シームレスでフレキシブルな1フロア3看護病棟
- SSを中心とした看護の容易な構成



R・HF

- 迅速かつ確実な搬送を実現するヘリポート



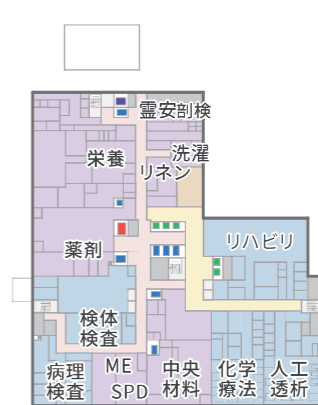
1F 救急・放射線フロア

- 救急に放射線を隣接させ、緊急検査に対して迅速対応
- 独立した運用が可能な講堂



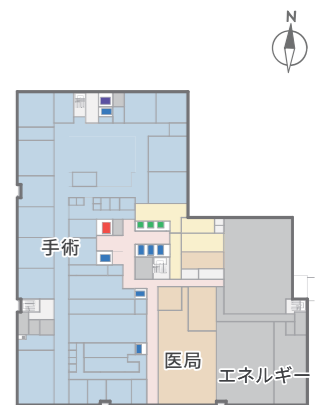
2F 外來機能集約フロア

- 総合受付を含めた外來機能の集約化
- ホスピタルストリートを中心に分かり易く迷わない空間構成



3F 供給部門+通院治療センター

- 供給部門をスタッフ専用エリアとして集約配置
- 病棟、外來の中間フロアに通院治療関連部門を配置

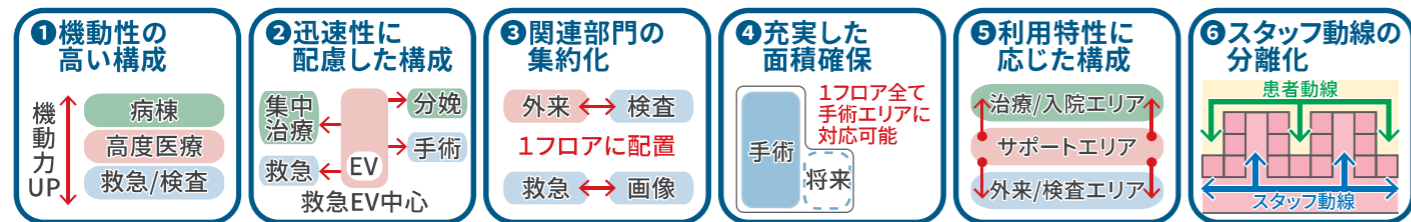


4F 手術+医局フロア

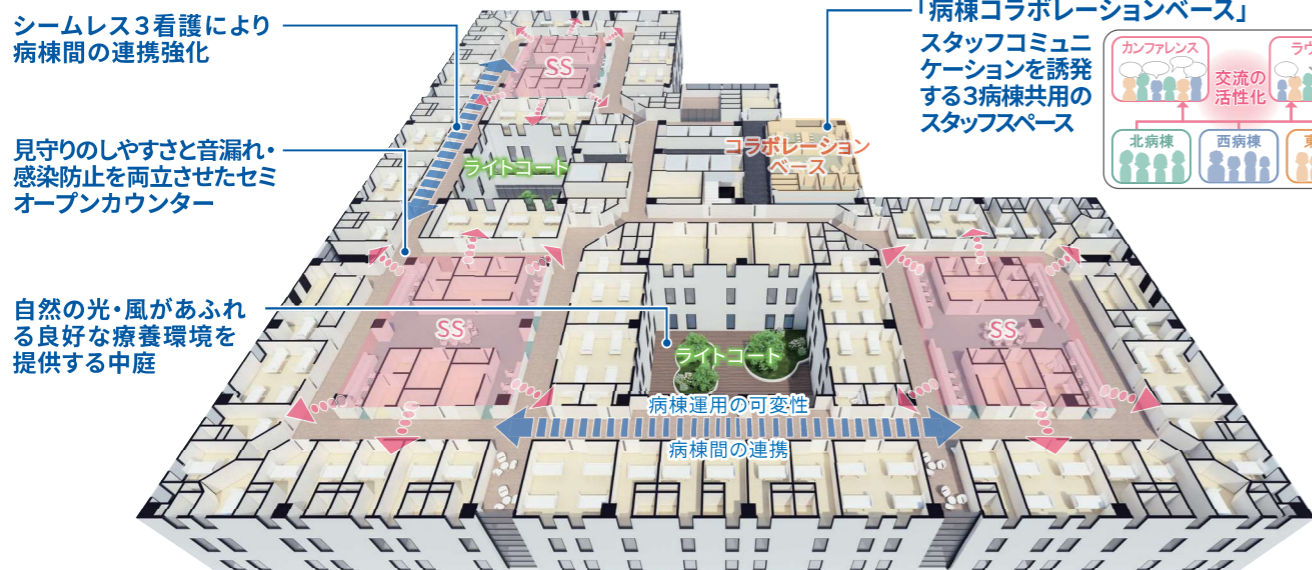
- 器材ホール型の機能的な手術ゾーン
- 医局を隣接させ、緊急時にも迅速に対応可

急性期病院としての機能を支える6つの計画ポイント

・関連部門の集約化や連携強化等により市民病院にふさわしい機能性・機動性・迅速性を確保します。



シームレスなチーム医療を促進する1フロア3看護単位病棟



働きがいのある職場環境の実現



●スタッフステーション

・スタッフステーションは十分な広さを確保し、薬剤師・学生など様々なスタッフが一同に利用可能

●病棟コラボレーションベース

・病棟の中央部に3病棟共同のカンファ・休憩室を集約
・多職種の交流がやすく、強固なチーム医療の実現を支援



ウィルスに屈しないパンデミック対応病院

●段階的な感染患者入院対応

・感染患者入院エリアを明確に設定：パンデミックの拡大状況に応じて、順次段階的にエリアを拡大できる構造とします。

フェーズⅠ

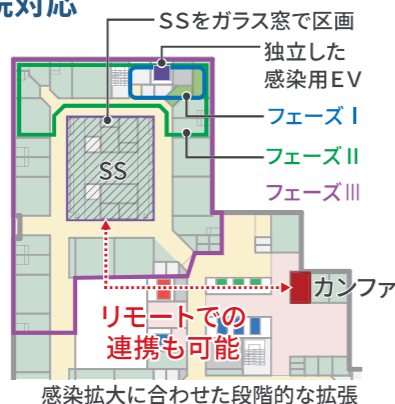
:通常時陰圧個室での対応

フェーズⅡ

:感染拡大時移動間仕切で区画

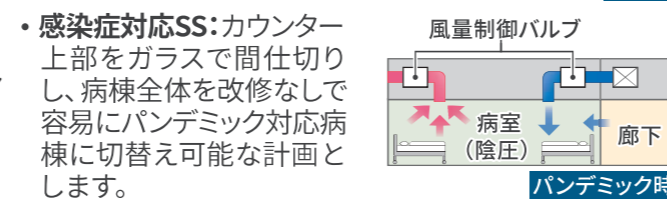
フェーズⅢ

:感染拡大時病棟単位での運用



●パンデミック対応病棟(フェーズⅡ、フェーズⅢ)

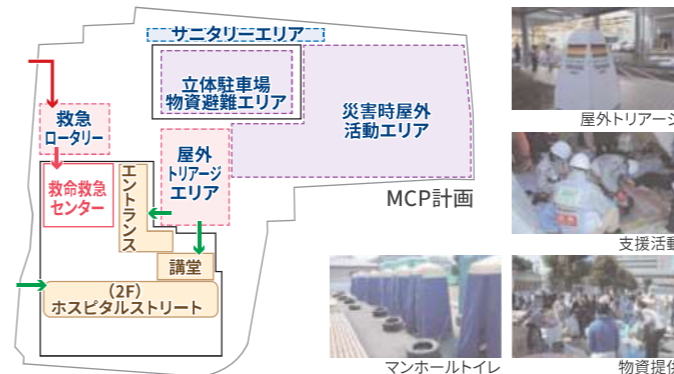
・陰圧管理可能な感染病室：8北病棟には、あらかじめ風量制御バルブを組み込み、病室を等圧から陰圧への切替を可能とします。



人命を守り機能を継続するノンダウンホスピタル

●MCP計画(Medical Continuity Plan)

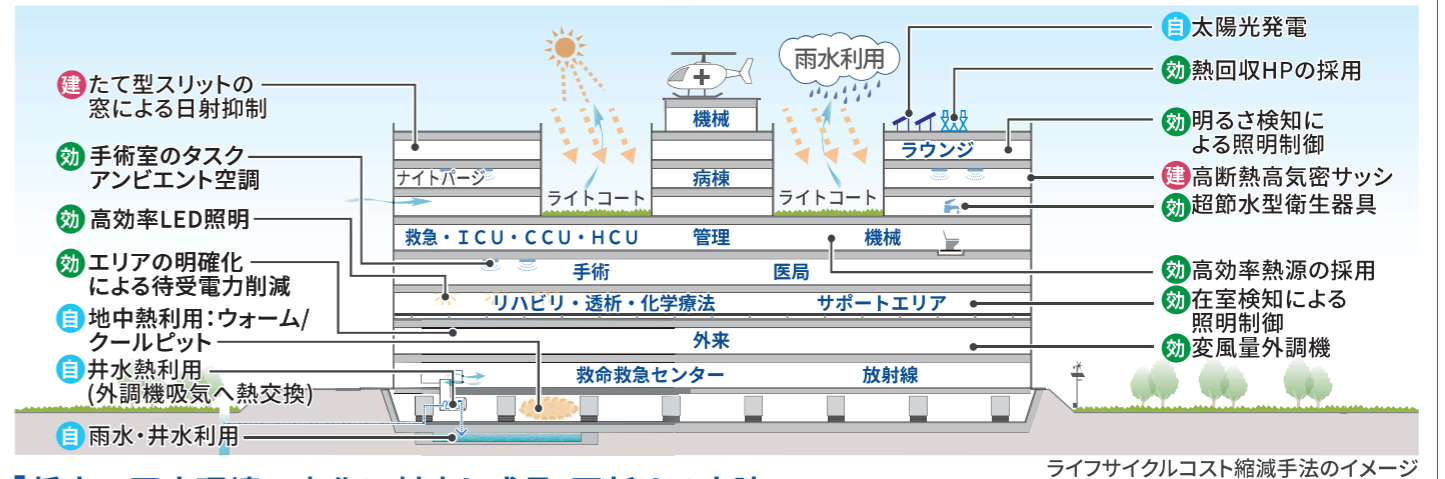
各種災害を想定し活動エリアを機能別に分化します。適切な入館制限や、重症度別の受入動線の確保で、被災者・傷病者への対応を柔軟に行います。



●山王川洪水浸水時にも病院機能を維持

浸水対策：建物周辺地盤を現状地表面から1.8m嵩上げし、予想される最大の浸水に対応します。また、特高電気室等を2階以上に設置することで、エネルギー供給を維持し続けられる計画とします。

最新の環境技術により医療継続性と環境配慮を両立



将来の医療環境の変化に対応し成長・更新する病院

